

# かながわの学習資源に関する研究

－ 「道」「外国人」「文学」を中心としたデジタル教材開発 －

荒川 憲行<sup>1</sup> 戸田 崇<sup>2</sup> 山本 城<sup>1</sup>

改正教育基本法でうたわれているように、国や郷土の歴史・文化・伝統に対する理解を深め尊重する態度を養うことは重要な課題である。こうした動向を見据え、平成 20 年度より 2 ヶ年計画で、生徒にとって日々の生活の基盤である「かながわ」全体を視野に入れ、特に「道」「外国人」「文学」に焦点を当てた学習資源のデジタル教材開発を行った。

## はじめに

平成 18 年 12 月に教育基本法が改正され、その中の「教育の目標」では、他国を尊重し国際社会の平和と発展に寄与していく態度を養うこととともに、国や郷土の歴史・文化・伝統に対する理解を深め尊重する態度を養うことの大切さが挙げられている。

神奈川県では、平成 19 年 8 月に「かながわ教育ビジョン」が策定され、その中でかながわの魅力に基づく「かながわの自然や歴史・風土、文化芸術、産業や観光などを背景にした各地域の様々な活動などを『かながわ学』として発信」（神奈川県教育委員会 2007）するとしている。また、県立高等学校における日本史に関する科目の必修化に向けて独自の取り組みも進めており、新たな科目（「郷土史に関する科目」「近現代史に関する科目」）が創設される予定である。

このような状況の中、教科指導等によって、生徒が国や郷土に対して関心を高め、理解を一層深めることは重要な課題である。総合教育センターではこれまでも平成 14 年度より神奈川の文化財や自然をいかしたデジタル教材やその指導法に関する研究、博物館を活用した教材開発研究を行ってきた。平成 16 年度にデジタル教材「都市横浜の歴史」(DVD)を作成し、また平成 17 年度には小・中学校でのデジタル教材の活用に向けた神奈川の学習資源の調査研究を行い、「神奈川の地域学習資源リンク集」(<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/chiki/>)を作成している。

そこで、今までの総合教育センターにおける取り組みを踏まえ、県内各地域を中心とした教材から県全域を視野に入れた、かながわの特色を学習できる新たな学習資源の教材開発に、平成 20 年度から 2 ヶ年計画で取り組むこととした。しかし、県内の学習資源を地域の偏りなく収集することはかなわなかったことを付記しておきたい。

なお、本稿では、行政区域を示す場合は「神奈川」

と表記し、神奈川県域を中心とした文化的地域や県域周辺を含むものは「かながわ」と表記した。また、過去の総合教育センターの研究集録等で参考にしたものについてはその表記に従った。

## 研究の目的

本研究の目的は、生徒にとって日々の生活の基盤である「かながわ」の歴史・文化等を中心に「かながわ」全体を一つの地域としてとらえ、学習に役立つデジタル教材の開発である。具体的には、かながわの「道」「外国人」「文学」に焦点を当て、生徒が神奈川県の歴史・文化等に対して、より一層興味・関心を高めて理解を深め、教科等の学習目標を達成することができるような教材開発を目指した。

## 研究の内容

昨年度は高等学校の地理歴史科を主に対象とし、「道」をテーマとして研究を進めた。今年度は「道」の研究に、外国語科（英語）の「近代かながわと外国人」と国語科の「かながわの文学」を新たにテーマとして加え、幅広い教科等で使用できる教材開発についての研究を行った。

### 1 デジタル教材の意義

デジタル教材開発の意義については、昨年度の神奈川県立総合教育センター「平成 20 年度研究集録第 28 集」の本研究中間報告において述べたとおりである。次にその要旨を記しておく。

- ・ ICT を活用した授業によって、児童・生徒の興味・意欲、満足度が高まり、さらに知識・理解の増進に関しても効果があるという調査結果を踏まえていること。
- ・ ICT を活用することによって、多くの教員が授業の質の向上を図ることができ、授業改善に役立つと感じている調査結果を踏まえていること。

1 カリキュラム支援課 指導主事

2 カリキュラム支援課 主幹兼指導主事

以上の調査結果から、今回の教材は個人では入手するのが難しい貴重な資料を博物館・文学館等から収集し、それらの画像にキャプションを付し、一部に音声を入れたデジタル教材を作成した。そしてそれを授業等で活用し、かながわに対する生徒の興味・関心を高め、理解を深めることができる教材とした。また、教員がコンピュータ操作に関する専門的な知識がなくても授業等で活用できる操作性のよい教材を目指し、授業改善等で役立つものとした。

## 2 「かながわの道」

昨年度、本研究を始めるに当たり、教材のテーマ「かながわの道」を設定した。各時代には代表的な「道」があり、それらは昔も今も人々の生活・文化・産業等と密接に関係している。生徒は各自の生活圈や通学圏を通る「道」の学習によって、身近な話題から興味・関心を高めて日本史学習に向かうことができ、「かながわ」全体を、ひいては日本全体の各時代を見通した学習につなげることができると考え、教材開発を行った。

### (1) 全体構成

取り上げる「道」は、古代から近代までの四つの大きな時代区分に合わせて選定した。それぞれ、「の道」というサブタイトルを付したのは、各時代における「道」の存在意義をあらかじめ明らかにしておこうという意図による。

- ア 古代 官の道～古東海道・足柄道
- イ 中世 武の道～鎌倉道
- ウ 近世 庶民の道～東海道・金沢道・浦賀道
- エ 近代 産業の道～鉄道

ただし教材のコンテンツは、「ウ 近世」「エ 近代」に重点を置いて作成した。後にも述べるが、古代・中世の「道」については諸説あり、現在そのルートを正しくたどることが難しい。しかし、近世については江戸幕府によって整備された宿駅制が一定の共通したスタイルを持っていることから、東海道のみならず、脇往還（わきおうかん）沿いの他の地域においても、このデジタル教材をヒントにした同様の学習資源を教員が求めやすいと考えた。近代についても、わが国初の鉄道開通以来、いわば先進県として多くの鉄道がネットワークを形成しており、やはり広い地域から学習資源を求められると考えた。以下、各時代の「道」の教材化に関する考察と今回のデジタル教材について簡潔に述べる。

### ア 古代 官の道～古東海道・足柄道

古代の「道」は、律令国家の統治システムを維持するための「道」であった。ともすれば西日本を中心に描かれがちな古代史を郷土かながわに近づけるために、

想定される官道のルートや駅家の位置を示し、また「延喜式」における駅家の馬の数や「万葉集」に見られる難所としての足柄峠の様子を教材化することを試みた。

### イ 中世 武の道～鎌倉道

中世の「道」については、幕府開設の地である鎌倉への出入り口であった「切通（切通し）」を取り上げた教材作成を検討した。また、「鎌倉道」は現在消滅した部分も多いと言われ、正確にルートをたどることは困難であるが、昨年度の調査研究協力員が「中の道」を取り上げ、教材化の可能性を探った。

### ウ 近世 庶民の道～東海道・金沢道・浦賀道

近世の「道」は、幕藩体制の確立による政治的・軍事的安定に伴い、諸産業が発展し、庶民が主要な街道を往来する時代となったことを実感できるように教材を作成した。具体的には、県域を貫く主要な街道として東海道を取り上げ、県内九つの宿場を中心に学習資源を収集した。また、庶民の旅の様子を金沢道を通して描き、さらに浦賀道を主題として「道」をたどる教材の一例を示した。（第1図）

なお、「道」に関する重要な学習資源として、大山大道（矢倉沢往還）や中原往還・津久井往還なども存在するが、今回は東海道からの分岐点を幾つか示す形で扱った。



第1図 「かながわと近世の道」のスライド

### エ 近代 産業の道～鉄道

近代は「産業の道」とし、具体的には、鉄道を取り上げた。生糸をはじめとする輸出品は、鉄道によって貿易港横浜に運ばれるようになり、建築材料として需要の高まった砂利も鉄道により輸送された。この教材では、これらの産業に直接結び付く鉄道とともに、鉄道の発祥と深くかかわり、神奈川県を横断する東海道線を中心に、近代の道すなわち「産業の道」としての鉄道を取り上げた。

### (2) 学習指導要領との関係

この教材は、主として高等学校地理歴史科の科目や総合的な学習の時間、さらに本県が独自に創設を進めている日本史に関する新たな科目「郷土史に関する科

目」「近現代史に関する科目」等での活用を想定して作成した。ここでは、新高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）と各科目の内容との関係を整理することとする。

日本史Aにおいては、「2 内容(1) 私たちの時代と歴史」に、「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、近現代の歴史的事象と現在との結び付きを考える活動を通して、歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせる。」とある。内容(1)は、科目の導入として位置付けることとされているが、例えばこのデジタル教材の「近代 産業の道～鉄道」を活用し、生徒の生活圏・通学圏を通過する鉄道の歴史に注目させて学習を始めることで、興味・関心を高めることにつなげることができる。

日本史Bにおいては、「2 内容(3) 近世の日本と世界」の、「ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容」に、「幕藩体制下の農業など諸産業や交通・技術の発展、町人文化の形成、欧米諸国のアジアへの進出、学問・思想の動きに着目して、近世の都市や農山漁村における生活や文化の特色とその成立の背景、幕藩体制の変容と近代化の基盤の形成について考察させる。」とある。

この中項目について、高等学校学習指導要領解説地理歴史編（文部科学省 2009）では、「この内容の指導に当たっては、地域の文化財を活用したり民俗学の成果を活用したりして庶民の生活史として学べるよう配慮することが望ましい。」としており、その視点からも、近世のかながわを形成した人々の姿、生活の様子を「道」を通して学ぶことに意味を見いだすことができる。

また、日本史A・Bともに、「3 内容の取扱い(1)ウ」において、「年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること。」とあり、実際に当時の「道」をたどるフィールドワークを実施したり、地域の博物館などを見学して入手した資料等を活用して探究し、考えを論述する活動につなげていったりすることが重要であると考えられる。

最後に、地理Bについては「2 内容(1)イ 地図の活用と地域調査」の中で、「直接的に調査できる地域を地図を活用して多面的・多角的に調査し、生活圏の地域的特色をとらえる地理的技能を身に付けさせる。」とある。このデジタル教材でしばしば登場する「絵図」と現代の地図を併用して土地利用の変化を長いスパンで考えさせるなど、地理的分野においても適宜活用することができる。と考える。

### (3) 各時代の「道」概説と教材作成のポイント

#### ア 古代 官の道～古東海道・足柄道

古代において、現在の神奈川県を通過する「道」は、どのようにたどることができるだろうか。例えば記紀のヤマトタケルの遠征伝説をみると、古事記において

は、小野（厚木市）・走水（横須賀市）・坂本（南足柄市関本）といった県内の地名を確認することができる（小野は地名ではなく普通名詞とする説もある）。

このことから、律令体制確立以前に現在の県域を東西に貫く交通路が存在したとも考えられる。特に、走水からは東京湾を海路東へ向かい房総半島南部へ再上陸するルートが、律令制度確立以降の相模国 上総国 下総国という国名の順路にかなっていることから、これを古東海道と考えてよいのではないかと。

もちろん、日本史の授業に求められるのは教材として用いる資料（史料）の客観性である。記紀の記述はあくまで「伝承」に過ぎないが、律令体制確立期の五畿（き）・七道や国郡制の行政区分を扱う際の導入として、古東海道に触れることは可能である。

古代の「道」を教材化しようとする、国府の位置が問題となる。相模国府の位置は、未だ不確定であり、幾つかの見解がある。またその変遷についても学説が分かれている。ここでは、駅路が国府と国府の連絡路であり、官道としての役割を果たしたことを生徒が理解することが重要である。

#### イ 中世 武の道～鎌倉道

本県は、鎌倉幕府成立の地であり、古都鎌倉は県内有数の観光地として、高校生にはなじみ深いものである。鎌倉幕府の封建的主従関係を説明する際にしばしば用いられるのが「いざ鎌倉」という言葉である。將軍に対する御家人の「奉公」は、非常時の軍役・平時の京都大番役や鎌倉番役という形で行われたが、例えば軍役の際に家の子・郎党を引き連れて鎌倉にはせ参じる道が、正に鎌倉道であった。つまり、関東の御家人の本領と政権の中樞鎌倉を結ぶ道である。

鎌倉道のうち、上の道・中の道・下の道の3本が幹線道路である。上の道は遠く信濃国から上野国を経、武蔵国のほぼ中央を縦断し、瀬谷・飯田を通り鎌倉に至る。中の道は、北辺の奥州から下野国を経、武蔵国の東側を縦断し、荏田・二俣川・戸塚・笠間を通って鎌倉に至る。

下の道は、常陸国から下総国、または安房国・上総国から下総国府を経、東京湾沿岸を南下して金沢・六浦を通り鎌倉へ至る。

上の道は、1333（元弘（こう）3）年の新田義貞による鎌倉攻めの進軍ルートであり、1205（元久2）年に畠（はたけ）山重忠が討ち死にした二俣川は中の道の途上である。授業の中で、これらの道を効果的に提示し、高校生が認識する現在の地名を織り込んで、中世を身近に感じさせることもできる。

#### ウ 近世 庶民の道～東海道・金沢道・浦賀道

近世については、「道」の概説のみならず、今回作成したデジタル教材についても解説を加えた。

#### (ア) 東海道について

##### a 道の分岐をとらえる工夫

近世の「かながわの道」を教材化するに当たっては、まず県域を東西に貫く東海道を背骨とし、そこから分岐する幾つかの道を、今も残る道標を示すことで確実にとらえるように心掛けた。川崎宿の入口では、六郷川（多摩川）に沿った大師道への分岐（当時の万年横丁：川崎大師の道標）、保土ヶ谷宿では金沢道・鎌倉道への分岐（いわゆる金沢横町の道標）、戸塚宿近くでは、大山大道道標（大山不動尊の道標）と広重の浮世絵に描かれた鎌倉道への分岐（妙秀寺の道標）、藤沢宿の江ノ島道道標、さらに四ッ谷不動堂の大山大道道標などである。これらは、東海道と脇往還の分岐を示す道標であり、当時の人々にとって、信仰と遊山がいかに大切なものであったかを実感することのできる資料だと言える。さらに、平塚宿のスライドでは、あえて宿場を北に2kmほど離れ、中原御殿跡の史跡も取り上げた。この道が、家康入府前から整備された政治・軍事上の要路であり、江戸と東海道の平塚（終点は大磯とする説もある）を直結する重要な脇往還であったこと、大名の通る東海道を嫌う商人たちが頻りに利用したこと、さらに小杉御殿が現在の新丸子にあり、平塚の中原を語源として現在の川崎市中原区が命名されたことなどを授業に盛り込むことも考えられる。川崎市内の高校生が、同じ県内とはいえかなり隔たった平塚市の地名を身近に感じることができるとすれば、いわゆる郷土史を市町村レベルでとらえるのではなく、“かながわ”という大きな単位の中で理解しようとする姿勢ははぐくむことも可能である。

#### b 絵画資料の活用

昨年度の調査研究協力員会において、「かながわの道」教材化の一つの視点として、“過去と現在の対比”を盛り込むこととした。昨年度の資料収集段階で、『東海道分間延絵図(ぶんげんのべえず)』、『浦賀道見取絵図』、初代広重『東海道五拾三次』宝永堂版、『武州金沢擲(てき)筆山地蔵院能見堂八景之画図』などを関係機関からデジタルデータで入手していたが、今年度は更に『東海道五十三次將軍家茂公御上洛(らく)図』を加え、県内の宿場や宿間の風景を現在の写真と対比できる絵画資料に厚みを増した。(第2図)

例を挙げると、川崎宿では広重『東海道五拾三次之内 川崎 六郷渡舟』と、現在の六郷大橋近辺の写真の比較、同じく神奈川宿においては、広重『東海道五拾三次之内 神奈川 臺(だい)之景』と『東海道五十三次將軍家茂公御上洛図 神奈川』の両方を現在の台町の坂道の写真と比較できるように工夫した。他の宿場においても同様の構成を心掛けたが、ここでは割愛する。

ただし、これらの絵画は正確な写生画ではない。広重の『東海道五拾三次』や、『東海道五十三次將軍家茂公御上洛図』は、書き手の画風によりデフォルメされていることを、授業で活用する際に説明する必要があ

る。ちなみに『東海道五十三次將軍家茂公御上洛図』は、常に行列の進行方向が上方ということになり、生徒に“上洛”という概念を理解させるのにも役立つ。この資料は比較的最近になって知られるようになったことから、授業等においても新鮮な教材と言える。



第2図 東海道「平塚」のスライド

#### (イ) 金沢道について

近世においては、寺社参詣(けい)や遊山の旅が盛んに行われた。その背景には、江戸幕府という統一政権の成立と交通網の整備、さらに人々を旅に駆り立てた情報の伝播(ば)があった。情報を伝える重要な役割を果たしたのは寺社である。寺社は、靈験を説いてお札を配り、各地を歩き回って信者を獲得していった。村々では、伊勢講・大山講・富士講など寺社参詣のための講が組織され、講の構成員はお金を出し合って交代で社寺に参詣(代参)する旅に出た。観光地を旅する遊山もそれにつれて盛んとなった。その需要にこたえる絵地図や道中案内記・名所図会、十返舎一九の『東海道中膝栗(ひざくり)毛』や歌川広重の『東海道五十三次』など旅を扱った出版物が多く発行され、それらがまた人々を旅に誘ったのである。

寺社参詣は、多くの場合近隣の観光地などをセットにして巡覧した。県域では、寺社参詣として川崎大師・遊行寺・大山阿夫利神社・大雄山最乗寺などが、物見遊山としては金沢八景や鎌倉・江ノ島、箱根七湯などが近世後期に多くの旅行者を集めた場所である。県域には、このように江戸庶民にとって手ごろな旅のコースを組みやすい名所が多くあり、その旅は信仰と遊山を兼ねたものであった。

今回取り上げた金沢道については、能見堂や金龍(りゅう)院などの名所や、千代本・東屋などの旅亭では八景絵図などの墨刷り絵図や錦(にしき)絵、案内書などを刊行し、名物を宣伝して旅客を呼び込んだ。金龍院では歌川広重に依頼して「金沢八勝図」を刊行するなど、中央と地方を緊密に結び付けることにもなった。

この教材では、「金沢遊覧を中心とした物見遊山の旅」と題し、近世の旅の基本情報と、保土ヶ谷から金

沢八景・六浦・朝比奈にいたる道をたどった様子をスライド化した。

#### (ウ) 浦賀道について

東海道の保土ヶ谷宿から浦賀に向かう「西廻り」と戸塚宿から浦賀に向かう「東廻り」の二つのルートを、浦賀を起点として逆にたどる教材を作成した。

「西廻り」は、終点を鎌倉、「東廻り」は終点を金沢八景の瀬戸神社とした。

出発点の浦賀はペリー来航の地として知られているが、それ以前に廻船問屋(かいせんどいや)および干鯛(ほしか)問屋で栄えた町である。1720(享保5)年、幕府は浦賀奉行所を設置し、江戸に出入りするすべての船舶を船番所で検査する、いわば“海上の関所”としての役割を持たせた。奉行所の指揮下において、その実務を担当したのが廻船問屋である。また、浦賀を発展させたもう一つのグループは、東浦賀の干鯛問屋であった。

先に述べたペリー来航の地として、その地名は以前から知られているが、海防上の要地としてばかりでなく、商人たちの活発な経済活動についても目を向けさせることが重要である。

西廻りについては、『浦賀道見取絵図』を利用して、道が連なる様子を実感できるように工夫したことも、この教材の特徴である。

#### エ 近代 産業の道～鉄道

1869(明治2)年、明治政府は東西両京間の鉄道建設を決定、1872(明治5)年には新橋-横浜間の本営業が始まった。鉄道敷設に献身的にかかわったのは御雇い外国人エドモンド・モレルである。

鉄道の存在意義は、1877(明治10)年の西南戦争における軍事輸送で明らかとなった。県域では海軍鎮守府や工廠(しょう)のあった横須賀を結ぶ横須賀線の開通や、現在の桜木町にあった初代横浜駅が、軍事輸送に不都合なスイッチバックを解消するために移転するなど、軍事と結び付いた鉄道の姿を見ることができる。

東海道線が全通すると、日清戦争後の産業革命の進展の中で、東海道線沿線には多くの企業や工場ができ、その輸送力に大きな期待が寄せられた。

鉄道は、代表的輸出品である生糸の輸送にも大きくかかわった。長野・山梨といった生糸の多産地から中山道や甲州街道を経て八王子へ集められた生糸や絹織物は、かつて荷車で横浜港まで運ばれていたが、この日本の“シルクロード”にも鉄道建設の出願が相次ぎ、1908(明治41)年に横浜鉄道が東神奈川-八王子間に開通した。この横浜鉄道は1917(大正6)年10月には政府に買収され、現在の横浜線となった。

大正期にコンクリート建築が広まり、建築資材としての砂利を多摩川や相模川から東京・横浜に輸送するための鉄道が誕生した。1923(大正12)年の関東大震災後は復興にあたって鉄筋コンクリートが広く採用さ

れたので大量の砂利が必要とされた。大正後期以降、相模川の砂利輸送に大きな役割を果たしたのが、相模鉄道と神中鉄道である。後の太平洋戦争中には、相模鉄道は沿線に軍関係の施設も多くあることから国有化され、現在の相模線となる。そして旧神中鉄道の一部が現在の相鉄線である。また、多摩川の砂利を運んだ南武鉄道が、現在の南武線である。

これら三つの鉄道は、いずれも砂利輸送を主な目的として開業したが、1930年代後半以降、沿線の工業化と住宅化が進展し、都市における通勤輸送の比重の高い鉄道へと性格を変えていった。

鉄道の歴史は、軍事や産業、工業地帯の形成と都市化、それに伴う通勤客や観光客の輸送など、様々な点で近代史とかがわっている。

ここでは、鉄道が敷設された経緯や鉄道と戦争・産業との関係を生徒が理解するために、多くの写真や絵、地図などを活用した。また鉄道唱歌と東海道線を関連付けてスライドを作成するなど、構成上の工夫をした。

### 3 「近代かながわと外国人」

現在までかながわの歴史・文化・産業・生活等に影響を与えた外国人は多く存在するが、高等学校の教科等で具体的にその人物像や功績を学ぶ機会是非常に少なく、外国語科(英語)の授業等で活用できる近代かながわに関係した外国人を扱った教材はほとんど見当たらない。本研究では、歴史上よく知られている人物と、一般的にはそれほど知名度は高くないが、かながわの郷土史の中で重要な役割を持つ人物をバランスよく選び、ペリー、モレル、パーマー、ヴェルニー、コーブランド、ヘボンの6名を取り上げた。かながわに対する生徒の興味・関心を高め、理解を深めることができる教材となるよう配慮した。

#### (1) 全体構成

本研究で取り上げた6名の外国人に関する教材の構成は、おおむね次のとおりである。

- ・外国人とかながわ〔かながわにゆかりのある外国人を英文(音声付)で解説〕
- ・ミニ伝記〔画像を多く取り入れた日本語による解説〕
- ・人物解説〔日本語による詳細な解説〕
- ・英語教材集〔リスニング・読解問題、発展学習における課題等を掲載〕
- ・解答と解説〔英語教材集の解答と解説及び参考資料等を掲載〕

まず、かながわと人物との関係を第一に考え、「外国人とかながわ」を最初に取り上げた。英文は高校の初期の段階でも理解できるように難しい語句には注釈を付けた。また、英文には音声を付けることで、リスニングを通して内容を理解することも可能とした。

次に「ミニ伝記」のコーナーを設け、画像を多く取り入れることで視覚に訴えながら人物の理解を助ける

形式で作成した。「人物解説」では、「ミニ伝記」の内容をより詳しく解説することで、外国人とかながわとの結び付きをより深く理解可能なものとした。「ミニ伝記」「人物解説」の内容と「外国人とかながわ」の英文内容とはできるだけ重複するようにし、生徒の実情に合わせ、英文による理解が難しい場合には、まず日本語による「ミニ伝記」あるいは「人物解説」を学習してから英文の学習を行えるように配慮した。

「英語教材集」では、生徒の興味・関心を高めるような題材を取り上げ、リスニング・読解問題、発展学習で使用する課題等を用意し、「教材の解答・解説及び活用例」を準備することで、授業等ですぐに活用できるようにした。

教材を通して考慮した点は、単なる人物紹介に終わらず、かながわとの関連をしっかりと踏まえた教材とすること、英語の学習はもとより、地理歴史科や総合的な学習の時間等の学習においても活用可能な教材となるよう工夫することで、横断的な学習を意識した教材としたことである。さらに、英語のスキルを学習する部分に加え、英語を通して生徒が外国人の生き方などを通じ、自身の生き方を考えられるような教材にしたことも工夫した点である。

## (2) 学習指導要領との関係

「近代かながわと外国人」は、主として高等学校の外国語科の各科目や総合的な学習の時間等での活用を想定して作成した。ここでは、新高等学校学習指導要領(平成21年3月告示)と各科目の内容との関係を整理することとする。

外国語科においては、「第4款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」の2の(1)には、教材の題材として「その外国語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」とあり、かながわに関係した外国人に関する教材は、生徒の興味・関心を高めることにつなげることができる。

また、「ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。」「ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。」という観点からも、各人物の生き方や考え方を知り、生徒自身の進路を考えたり、国際理解を深めたりすることができる内容となっている。

「(3) 辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること。」という観点に対しては、「英語教材集」に辞書を活用して答えさせる問題を用意した。効果的な辞書の使い方を指導する上での参考とな

ると考える。さらに、「(4) 指導方法や指導体制を工夫し、(中略)視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワークなどを適宜指導に生かしたりすること。」と示されており、本教材はこのねらいを踏まえたものとなっている。

総合的な学習の時間については、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の1の(2)において、「教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと。」と述べられている。一例を挙げると、本テーマで取り上げた、『鉄道建設の父』と言われているモレルとかながわとの関連は、「かながわの道」の中の近代で取り上げた鉄道と関連付けて学ぶことができ、一人の人間の生き方から近代かながわの産業に与えた影響など、横断的・総合的な学習が期待できる。

## (3) 取り上げた人物と教材について

### ア ペリー

Matthew Calbraith Perry(1794-1858)は1854年日米和親条約(神奈川条約)を締結した人物である。教材開発に関しては、開国を迫った二度の来日と条約調印までの経過及び現在までのかながわとペリーとの関係を中心に考えた。

教材化の工夫では、ペリーの久里浜・横浜上陸と横浜の応接所を訪れた様子など、ペリー艦隊に随行した画家ハイネが描いた絵の画像を効果的に活用し、生徒が当時の状況を具体的にイメージできるように工夫をした。

また、ペリー上陸記念碑が建てられた経緯を英文で示し、英文の理解だけでなく現代の国際関係や日米関係について考えることができる内容とした。日米和親条約の条文を扱った教材では、第十一条の英文と和文を比較し、英語の語法の学習を始め、その解釈の違いなどを通して地理歴史科の授業にも活用できる内容とした。さらに、ハイネの「横浜上陸の絵」にある“たまくすの木”は、現在でも横浜開港資料館の中庭に現存している。過去の絵と現在の写真を重ね合わせることで、生徒の興味・関心を高めるように工夫した。

### イ モレル

Edmund Morel(1840-1871)は「鉄道建設の父」と言われ、日本初の新橋 横浜間の鉄道開通に向けて力を注いだ人物である。彼は大変な熱意を持って日本の鉄道建設に携わったが、30歳の若さで日本で亡くなっている。よって、入手可能なモレルに関する資料は比較的限られているが、日本の鉄道・産業への貢献は非常に大きく、彼の業績を多方面からとらえられる教材開発を目指した。

教材化の工夫では、彼の一生を英語で振り返るとともに、彼の死後に開通した日本初の鉄道に関することを多く取り上げた。イギリスの「イラストレイテッド・

「ロンドン・ニュース」が報じた当時の鉄道開業式の様子などを教材とし、当時の日本の様子を外国人の目からどのように見ていたかなど、イラストと英文で生徒の学習に深みを持たせる工夫をした。(第3図)

また、「かながわの道」では近代における産業の道として鉄道を扱っているが、日本初の鉄道建設に大いに貢献したモレルの人物像を学ぶことから始まり、現代の産業発展のかなめであり、高校生の日々の生活とも密接な関係のある鉄道の歴史を学ぶことで、幅広い学習が可能となっていることもこの教材の特徴である。



第3図 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース 【神奈川県立歴史博物館所蔵】

#### ウ パーマー

Henry Spencer Palmer(1838-1893)は横浜近代水道の創設者として、その名を知られている人物であるが、The Times(London)東京通信員として日本の政局などについて論説を寄稿し、また天文、地質、気象、地震などの研究も行った。彼の多彩な取組みを通して、彼の生き方などを学ぶことができる教材とした。

教材化の工夫では、まず近代水道の創設者としての部分に焦点を当てた。次にパーマーがThe Timesに寄稿した英文から、手紙の宛(あて)名の書き方や姓名の呼び方など、イギリスと日本の違いについて学習できるようにした。また、英語と日本語の質問に対する答え方の違いについての英文から、英語の語法の学習ができるように工夫した。さらに、発展学習として彼の多彩な経歴に関して生徒が調べ学習を行うことで、かながわとのかかわりや、一人の人間としての生き方をより深く学ぶことができるように配慮した。

#### エ ヴェルニー

Francois Leonce Verny(1837-1908)は日本の海軍力、海運力の整備のため、横須賀製鉄所(後の横須賀造船所)を建設し、日本の近代産業に貢献した人物である。教材に関しては、2002年に横須賀市のヴェルニー公園内に建設されたヴェルニー記念館なども取り上げながら、彼の功績を考察できるように工夫した。

教材化の工夫では、ヴェルニーが横須賀製鉄所建設に尽力しただけではなく、横須賀市観音崎に日本で初めて洋式灯台を建設し、メートル法、会計簿などを日

本に初めて導入した点を扱い、かながわの産業の発展に欠かすことのできない人物として彼を取り上げた。このような彼の多くの功績から、かながわの産業の発展を考察することのできる教材を作成した。

#### オ コープランド

William Copeland(1834-1902)は横浜でビール醸造所「スプリング・ヴァレー・ブルワリー」を創業した。彼は日本におけるビール醸造の先駆的功績から、「日本のビール産業の祖」と呼ばれている。彼の書いた商用書簡などを通して、当時の商業の様子を理解できる教材を用意し、文法学習や辞書学習なども行える内容を盛り込んだ。

教材化の工夫では、コーブランドが1876(明治9)年7月から1884(明治17)年11月までに残した約530通の商用書簡から、高校生が興味を持つ内容のものを幾つかを取り上げた。ビールの取引先に宛てた書簡だけでなく領事裁判所や警察などとのやり取りもあり、こうした書簡を通してコーブランドのかながわにおける生活や、ビールづくりに対する姿勢などをうかがい知ることができる。

また、日本で作られた英語辞書の中の労作の一つに、「新英和活用大辞典」がある。これはコーブランドの妻ウメの弟、勝保銓(せん)吉郎が編纂(さん)したもので、その一部を参考にした英作文の問題も発展学習用に提示した。新高等学校学習指導要領にも述べられている辞書の活用の指導を意識した教材となっている。

#### カ ヘボン

James Curtis Hepburn(1815-1911)は、かながわに住み、医師としての医療・施術活動を行うとともに、聖書の日本語への翻訳や日本で最初の和英辞典『和英語林集成』の編纂等を手掛けた。また、ヘボンが考案した「ヘボン式ローマ字」は、現在でも広く使われている。彼が取り組んだ仕事に対する熱意や生き方が学び取れる教材づくりを目指した。

教材化の工夫では、上記のように、ヘボンの功績は多岐にわたっているため、彼の様々な功績を取り上げながら、ヘボンの日本や日本人に対する思いが高校生に感じ取れるような教材となることを目指し、彼の生き方に迫れるような内容とした。また、日本で最初の和英辞典『和英語林集成』を教材として取り上げ、現在の和英辞典との比較を試みた。

#### 4 「かながわの文学」

かながわは古代より数多くの文学作品の舞台となってきた。近現代においても、多くの作家たちがこの地にひかれ、様々な作品を残してきた。本研究では、「古典編」として6作品、「近現代編」として3名の作家を取り上げ、教材化を図った。作品と作家の選定理由等については後に譲るが、かながわの歴史の中で重要な役割を持つ作品と作家を選び、かながわに対して生徒

の興味・関心を高め、理解を深めることができるよう配慮した。

#### (1) 全体構成

かながわの文学を、「古典編」「近現代編」の2部構成で教材化した。

「古典編」は、「古事記」「更級日記」「平家物語」「謡曲『六浦』」「金槐(かい)和歌集」「十六夜日記」を取り上げ、原文の一部や写真、音声(和歌等の朗詠)等を含むスライドを作成した。視覚的・聴覚的な補助教材として、生徒の興味・関心を喚起するような活用を期待したい。

「近現代編」は、中島敦、夏目漱石、芥川龍之介の作品の中から、かながわにゆかりのあるものを取り上げた。スライドは、「人物解説」「作品紹介」「本文紹介」「関連する写真」等で構成されており、授業導入時の興味付けや探究的な発展学習の展開などでの活用を想定している。

#### (2) 学習指導要領との関係

「かながわの文学」は主として高等学校の国語科の各科目や総合的な学習の時間等での活用を想定して作成をした。ここでは、平成21年3月に告示された新高等学校学習指導要領と各科目の内容との関係を整理することとする。

国語総合では、「3 内容の取扱い(6)ウ(ク)」において、「我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。」としている。また、古典Aにおいても同様に、「我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。」との記述があり、今回作成した教材が今後の学習活動に資することが期待される。

また、「第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」では、「2 (3) 音声言語や画像による教材、コンピュータや情報通信ネットワークなども適切に活用し、学習の効果を高めるようにすること。」とある。

これらの点を踏まえて、本教材作成に当たっては、画像と音声を用いて視覚的・聴覚的に生徒の興味・関心を高め、更に発展的な学習へと展開していくことができるようなものとなるように配慮した。

#### (3) 古典編

取り上げる作品の選定は、次のような観点に基づいて行った。

かながわを舞台としており、かながわの高校生が興味を持って読むことができるものであること

「我が国の伝統と文化」について理解を深めることにつながるものであること

歴史的・地理的背景につながりを持ち、他教科との連携につなげていけるようなものであること

#### ア 「古事記」より「走水」

倭建命(やまとたけるのみこと)の東国遠征の場面を

紹介した。登場する地名は、相模の小野(厚木市)、走水(横須賀市)、足柄の坂本(南足柄市)である。

また、弟橘媛命(おとたちばなひめのみこと)の歌、  
さねさし さがむのをぬに もゆるひの  
ほなかにたちて とひしきみはも

を引用しながら、倭建命がかながわに入るまでの道筋を追体験できるようにした。

#### イ 「更級日記」より「足柄山中にて遊女にあふ」

作者の菅原孝標女(たかすえのむすめ)が、上総(かずさ)(千葉県)から京へ向かう旅で、にしとみ(藤沢市遊行寺付近)、もろこしが原(大磯付近)、足柄が登場する。(第4図)

原文を紹介しつつ、作者の出会ったかながわの姿がどのように描かれているかが伝わるように配慮した。



第4図 「更級日記」のスライド

#### ウ 「平家物語」より「腰越」

鎌倉時代前期の武将・源義経は、頼朝との不和が深まり、鎌倉に下向したものの、鎌倉入りを拒否され、腰越にとどまる。この時、頼朝の勘気を晴らすため、手紙(腰越状)を送るが、頼朝の勘気は解けず、かえって頼朝の迫害は続いた。

義経がとどめ置かれたとされる満福寺を写真で紹介している。

#### エ 「謡曲『六浦』」

「謡曲『六浦』」は、梅、松、藤、柳等を人格化し、草木の精として扱った曲の一つである。

作者と作品のあらすじをスライドで紹介した後、ゆかりの称名寺の写真を数枚紹介している。

#### オ 「金槐和歌集」

「金槐和歌集」では源実朝が詠んだ、かながわに関連のある歌5首を紹介している。小倉百人一首に入る実朝の歌を紹介しているので、百人一首の学習の際にも活用することができる。音声教材として、和歌の朗詠も収録した。

#### カ 「十六夜日記」

「十六夜日記」は作者である阿(あ)仏尼が晩年に鎌倉に住み、多くの歌を残したということで教材として収めた。作者の紹介、旅立ちの由来、かながわが舞台



となる本文の紹介等、和歌を引用しながら郷土かながわを紹介している。

#### キ 原文・口語訳編

ここでは、原文と口語訳を載せてある。授業等で必要に応じて生徒に配付したり、教員が説明の際に参考資料として活用したりすることが可能である。

#### ク 付録

付録として、「能の基礎知識」を取り上げ、能の歴史や能楽、能舞台の構造等について扱った。また、6作品以外でかながわを取り上げた作品として、「謡曲『江野島』」「太平記『稲村崎干潟となる事』」を取り上げ、生徒の興味・関心に合わせて更なる発展学習ができるようにした。

#### ケ 教材作品の活用方法

##### (ア) 国語の教材として

「国語総合」や「古典A」「古典B」の教材として扱う。原文は印刷して配付することを想定している。資料にある口語訳、スライドを併用しながら、読み物として楽しむとともに古典に親しみ、ものの見方、感じ方、考え方を広げることを目的とする。

さらに、その歴史的・地理的背景について触れることでその時代を感じ、舞台となったかながわの地に思いをはせることができるよう指導する。発展的な学習として、各自が感じたことを文章に表現して紙面発表会をしたり、登場人物等について話し合ったりする機会を作ることにより、考えを深めさせる指導も考えられる。

##### (イ) 「かながわの道」学習時の補助教材として

「かながわの道」の補助教材として、スライド・解説を活用することができる。その地で語られた物語を紹介することで、実感を伴った学習になることが期待できる。

##### (ウ) 近現代編

かながわにゆかりのある作家は数多い。ここでは特に著名であり、教科書等でもなじみのある作家という観点から、中島敦、夏目漱石、芥川龍之介の3名を取り上げた。また、作品としては、かながわを舞台としたものを取り扱った。彼らが描く郷土かながわの姿を読み味わいながら、作家あるいはその作品にとってかながわがどのような地であったのか、考えるきっかけとなるような教材とした。

#### ア 中島敦

中島敦(1909-1942)は東京の生まれだが、1933(昭和8)年、24歳のときに横浜高等女学校(現・横浜学園高等学校)に就職、これを機に横浜に移り住んだ。そのころの体験を基に私小説風につづられたのが、今回取り上げた「かめれおん日記」(1942)である。横浜山手の風景の中、博物の教師である主人公の体験や、繊細な神経ゆえの内面の苦悩が語られている。本教材では、「かめれおん日記」の本文の一部や山手外国人墓地

を写真で紹介し、作品を取り巻く世界の一端に触れることができるような教材とした。

#### イ 夏目漱石

夏目漱石(1867-1916)とかながわのつながりは深い。鎌倉や逗子、湯河原などでの体験を生かし、「門」「彼岸過迄(まで)」「行人」「こころ」「明暗」等の作品が書かれた。「門」(1910)は人生に不安を抱き悩んでいた28歳の漱石が鎌倉の円覚寺を訪れ、参禅した経験が描かれている。「こころ」(1914)は、語り手である「私」が鎌倉の海で「先生」と出会う場面から書き起こされている。本教材では、「門」「こころ」の本文の一部を紹介し、漱石とかながわのつながりの強さが浮かび上がるようにした。

#### ウ 芥川龍之介

芥川龍之介(1892-1927)は横須賀の海軍機関学校で英語の教鞭(べん)を取っていた。「鼻」が漱石の激賞を受け、文壇に華々しく登場した芥川が、本格的に文学活動を行った時期がこの頃である。「蜜柑(みかん)」(1919)には横須賀発の二等客車が、「トロッコ」(1922)には小田原近辺の軽便鉄道の敷設工事現場が、「屋(しん)気楼」(1927)には鵜沼海岸が、それぞれ舞台として登場する。本教材では、芥川の作品の中で、かながわという舞台が、いかに効果的に用いられているかを味わえるような構成とした。

#### エ かながわを舞台にしたその他の作品

本研究で取り上げた作品のほかに、かながわを舞台にした作品は数多くある。3名の作品の中に登場した横浜、鎌倉、横須賀、三浦、西湘地区、湘南地区にゆかりのある、その他の作家と主な作品を紹介し、一部の作家や作品に解説を加えた。3名の作品を窓口として、かながわの近代文学に興味・関心を持った生徒が、更なる学習を行えるように工夫をした。

#### オ かながわの文学館等

神奈川県には神奈川近代文学館をはじめ、多くの文学館、記念館が存在する。それぞれの文学館、記念館のサイトにリンクを張り、生徒が調べ学習や社会見学の際に活用できるようにした。

#### カ 教材作品の活用例

- 例1 ポスターセッション：本教材の内容をみて、興味を持った作家、作品について更に調べ、模造紙にまとめて発表する。他の発表を聞いて相互評価を行い、振り返りを文章でまとめる。
- 例2 新聞づくり：本教材の内容をみて、興味を持った作家、作品について更に調べ、新聞仕様にまとめて掲示する。「よいところ」を中心に気付いた点を付箋(せん)に書いて貼(は)っていく。
- 例3 スタンプラリー：本教材の内容をみて、興味を持った文学館や文学碑の地図を作成し訪問、報告書を作成する。1年間に数か所を巡ることとし、報告書をまとめて印刷、製本して配付する。

例4 Web サイトづくり：本教材の内容をみて、興味を持った作家、作品、あるいは文学館、記念館について調べ、Web サイト「かながわ文学ネット」を作成する。必要と思われる機関には許諾を取るなど、著作権についても学習する。

#### 研究のまとめ

平成20年度より2ヶ年計画で進めてきた本研究の目的は、生徒にとって身近な「かながわ」に対する興味・関心を高め、理解を深めるためのデジタル教材の開発である。

プレゼンテーション用スライドを教材の中心としてデジタル教材の特性をいかし、写真や絵、地図などを使ったり、アニメーション効果を加えたりするなど視覚的效果を活用した教材とした。また、操作性やコンテンツの構成等も検討し、授業等で広く活用できる教材づくりを目指した。

学習資源のテーマとして、「かながわの道」「近代かながわと外国人」「かながわの文学」を取り上げた。それぞれのテーマの特性に合わせて各教科で活用できるだけでなく、各テーマの内容で相互に関連性のある箇所にはリンクを張ることで、横断的な学習が可能な構成とした。このことによる生徒の学習効果を期待したい。

今後の課題としては、開発した教材を実際の授業でどのように活用することが、より効果的であるか検証をしていくことである。

#### おわりに

本研究では地理歴史科、外国語科（英語）、国語科を念頭に置いた、かながわの学習資源に関するデジタル教材開発を行ったが、今後は他の教科にも学習資源としての枠を広げ、高校生がより一層、かながわに興味・関心を高め、理解を深めることのできる教材開発への取組みを各学校・教員に期待したい。

なお、本研究を進めるに当たり、博物館、文学館等多くの機関には多大なご協力をいただき、多くの貴重な資料をデジタル教材にいかすことができた。ここに厚く御礼申し上げる。

最後になるが、日本大学の関幸彦先生には、ご多忙にもかかわらず、本研究のスーパーバイザーとしてご助言を頂き、心より御礼申し上げます。また、調査研究協力員の方々にも感謝申し上げます。

#### [調査研究協力員]

県立磯子高等学校	坂元 久美子
県立横須賀高等学校	中根 淳一
県立湘南高等学校	澤村 東樹
県立鶴嶺高等学校	中村 英之

県立相模原高等学校 小松平 由美子  
[助言者]  
日本大学 関 幸彦

#### 引用文献

神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」  
p.57  
文部科学省 2009 「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_3.pdf) (URLは2010年2月取得)

#### 参考文献

神奈川県県民部文化室 1988 『かながわの文学100選 - 舞台は神奈川 - 』かまくら春秋社  
神奈川県高等学校教科研究会国語部会編 1954 『神奈川県郷土文学資料 第一集』神奈川県教育委員会  
神奈川県高等学校教科研究会国語部会編 1988 『神奈川県近代文学資料 第一集～第六集』  
神奈川県東海道ルネッサンス推進協議会 1999 『神奈川の東海道（上）』神奈川新聞社  
神奈川県東海道ルネッサンス推進協議会 2000 『神奈川の東海道（下）』神奈川新聞社  
神崎彰利・福島金治 2002 『街道の日本史21 鎌倉・横浜と東海道』吉川弘文館  
紀田順一郎 2009 『横浜開港時代の人々』神奈川新聞社  
関幸彦 2003 『「鎌倉」とはなにか』山川出版社  
水野治 2003 「地域の学習資源の活用」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第22集)  
葉袋善郎 2006 『英語で読む！日本の歴史を決めた公文書』東京書籍